

信仰による一步



安息日午後 9月19日

暗唱聖句

キリスト・イエスにあっていただいているのと同じ思いを、あなたがたの間でも互に生かしなさい。キリストは、神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず、かえって、おのれをむなうして僕のかたちをとり、人間の姿になられた。その有様は人と異ならず、(ピリピ2:5~7、口語訳)

互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。キリストは、神の身分でありながら、神と等しい者であることに固執しようとは思わず、かえって自分を無にして、僕の身分になり、人間と同じ者になられました。人間の姿で現れ、(フィリピ2:5~7、新共同訳)

今週の聖句

フィリピ2:5~11、マタイ4:18~20、使徒言行録9:3~6、10~20、ヨハネ21:15~19、1ヨハネ3:16~18

今週のテーマ

天の栄光、天使たちの礼拝、父なる神との交わりを捨て去ることは、想像を絶する犠牲でした。しかしイエスは、父なる神の愛のご品性をあらし、人類の愛情を取り戻し、全人類をあがなうために、苦しみと死にあふれたこの世に來られました。「われわれのあがないの価は、あがなわれた者たちが救い主とともに神のみ座の前に立つまではわからない。そこで永遠のみ国の栄光が、歓喜しているわれわれの目の前に突然現われる時、われわれはイエスがわれわれのためにそうしたすべての栄光をお捨てになったことや、また天の宮廷からのさすらい人となられたばかりでなく、われわれのために失敗と永遠の損失という危険をおかしてくださったことなどを思い出すのである。」(『希望への光』728、729ページ、『各時代の希望』上巻146ページ)。

私たちが救うためにイエスが払われた犠牲は、計り知れません。私たちが主の導きに応え、主の命令に従い、み国のために失われた人々と接触するために主と協力するとき、犠牲を求められます。この働きは、居心地の良い場所から未知の領域へ私たちを導き出します。時として、主は私たちに犠牲を払うよう命じられますが、与えられる喜びははるかに大きいものです。

問1 フィリピ2：5～11を読んでください。これらの聖句は、キリストの思いの中心にあったものや、彼の全生涯を支配していた思考パターンを、どのように明らかにしていますか。

永遠の昔から、イエスは神と等しくあられました。パウロはこの永遠の真理を、「神のかたちであられたが、神と等しくあることを固守すべき事とは思わず」（ピリピ2：6、口語訳）という言葉ではっきり述べています。「かたち」と訳されているギリシア語は「モルフェ」で、物のまさに本質を意味します。それは、等しい価値の二つのものを結びつけるものです。『SDA聖書注解』は、そのことを次のように表現しています——「これは、父なる神と同等の立場にキリストを置き、ほかのあらゆる力よりはるか上に彼を据える。パウロは、キリストの自発的なへりくだりを生き生きと描くために、これを強調している」（第7巻154ページ）。キリストの永遠のご性質について、エレン・G・ホワイトは、「キリストのうちには、借りたものでもなければ、ほかから由来したものでもない、本来の生命がある」（『希望への光』950ページ、『各時代の希望』中巻345、346ページ）と付け加えています。

永遠の昔から神と等しくあられたイエスが、「自分を無に」なさいました。これも興味深いギリシア語の表現です。文字どおりに訳せば、「空^{から}にした」となります。イエスは、神に等しい者としての特権や権利を自発的にご自分から空^{から}にし、人間の姿になり、人間に仕える謙虚^{しもべ}な僕^{しもべ}になられました。彼は僕^{しもべ}として、天の愛の法則を全宇宙に示し、最終的に、愛の究極の行為を十字架上でなさいました。私たちを永遠に救うために、ご自分の命をおささげになったのです。

イエスの思いの中心にあったのは、自己犠牲の愛でした。イエスに従うとは、彼が愛されたように私たちも愛し、彼が仕えられたように私たちも仕え、彼が奉仕をされたように私たちも奉仕をすることを意味します。聖霊によって、イエスに私たちの自分勝手な野心^{から}を空^{から}にさせていただくとき、犠牲が伴うでしょう。イエスはすべてを犠牲になさいました。しかし、聖書はイエスについて、「このため、神はキリストを高く上げ、あらゆる名にまさる名をお与えになりました」（フィリ2：9）と記しています。

天国は、私たちが地上で払うどんな犠牲にも値します。時には犠牲を払うこともあるでしょうが、奉仕の喜びは、この世にあってもそれを上回りますし、永遠にわたってキリストと一緒に生きる永遠の喜びは、私たちが地上で払う犠牲をささいなものに思わせるでしょう。

あなたがペトロかヨハネであると想像してみてください。美しいガリラヤの朝に、太陽が昇り、凍るような夜の気を吹き払います。あなたは一つのことを考えています。魚を獲ること、しかもたくさんの魚を獲ることです。このところ大漁続きで、あなたはきょうも大漁を期待しています。早朝の日の光の中、彼が近づいて来るのが見えます。ナザレのイエスです。ほんのわずかな間にあなたの一生が変わってしまうことを、あなたは知りません。もうこれまでのあなたではなくなるのです。

問2 マタイ4：18～20を読んでください。ペトロとヨハネはイエスに従うために、なぜこれほど大きな献身をしたのだと、あなたは思いますか。魚を獲ることよりも大切な目的にイエスが彼らを召されたことは、聖句の中のどういうところからわかりますか。

ヨハネとペトロがイエスについて何らかのことを1年以上前から知っていたことがわかります。さらに、キリストには神聖な物腰があり、また彼の容姿、言葉、行動には、彼がこのガリラヤの漁師たちを神聖な働きに召しておられることを伝える何かがあったにちがいません。彼らが舟や仕事や慣れ親しんだ環境を捨ててイエスに従った理由は、より高い目的への召しを感じ取ったからでした。この普通の漁師たちは、自分たちが特別な目的のために召されたことに気づいたのです。神は、現在の職業を捨てるようにあなたを召しておられないかもしれませんが、特別な目的のためつまり、神のみ名の栄光のために、神の愛を伝え、神の真理をあかしすることのために、召しておられます。

問3 マタイ9：9にある徴税人マタイの召しについて考えてください。この聖句の中に、どのような注目に値することが見られますか。

「わたしに従いなさい」というキリストの招きは、マタイがイエスについてすでに聞いており、心の中に、イエスに従いたいという気持ちがあったことを前提にします。招かれたとき、マタイは用意ができていました。マタイが驚いたことに、キリストは彼を受け入れ、弟子の1人となるよう招いてくださったのです。

イエスに従うために人々があきらめねばならなかったものについて、考えてみてください。最終的に、なぜそれだけの価値があるのですか。

パウロがキリストを受け入れたとき、彼の人生は根底から変えられました。使徒パウロは聖霊の導きによって、地中海世界の至る所で多くの人に神の言葉を宣べ伝えました。彼のあかしはキリスト教とこの世の歴史を変えました。

問4 使徒言行録9：3～6、10～20 を読んでください。これらの聖句は、イエスがパウロの人生に対して神聖な目的を持っておられたことを、いかに明らかにしていますか。

イエスはしばしば、ご自分の名前をあかしさせるために、思いも寄らぬ人を選ばれます。悪霊に取りつかれた人、サマリアの女、遊女、徴税人、ガリラヤの漁師、キリスト教の猛烈な迫害者といった人たちを思い浮かべてください。これらの人たちはみな、恵みによって変えられ、キリストが彼らの人生の中でくださったことの物語を語るために、心に喜びを持って遣わされました。1人ひとりがその物語を飽きることなく語り続けたのです。キリストが彼らのためにしてくださったことがすばらしかったので、彼らはそれを伝えずにはいられませんでした。黙ってはいられなかったのです。

問5 使徒言行録28：28～31 とⅡテモテ4：5～8 を読み比べてください。これらの聖句の中で、魂を勝ち取る働きのためにキリストに生涯をささげたパウロの献身が揺らがなかったことが、いかに示されていますか。

パウロは人生の最後、ローマの自宅で軟禁されているときに、「この神の救いは異邦人に向けられました。

私たちの召命は、パウロの召命ほど劇的ではないかもしれませんが、神は、この世を変えるという神の働きと一緒に参加するよう、私たち1人ひとりを召しておられます。長年にわたって苦難に遭遇したにもかかわらず（Ⅱコリ11：25～30）、パウロが主にある召しに忠実であり続けたことは明らかです。イエスに従う者たちをかつて迫害していた人が、いかにキリスト教信仰の（イエスを除いて）最も影響力のある重要な唱道者になったのかという物語は、主の働きに献身した人を通して、主がどのようなことをなしえるかを力強くあかしし続けています。

何をするように神はあなたを召されましたか。あなたはそれをしていますか。

愛はいつも行為にあらわれます。キリストに対する私たちの愛は、失われた人間のために何かをせずにはいられない気持ちにさせます。パウロがコリントの教会に、「キリストの愛がわたしたちを駆り立てているからです」(Ⅱコリ5:14)と書き記したとき、彼はそのことをはっきり述べていたのです。イエスは、単に時間や才能や富を彼の働きのためにささげるよう私たちを招かれません。人生をささげるようにと、私たちを招かれるのです。

ガリラヤ湖畔で弟子たちと会われた朝、イエスは神の愛の要求のあらましをあざやかに述べられました。

問6 ヨハネ 21:15~19 を読んでください。イエスはペトロに、どのような質問を三度なさいましたか。そして、ペトロはどのように答えましたか。なぜイエスはこの質問を三度もペトロになさったのですか。

ペトロは、主を知らない、と三度言いましたが、イエスはそのペトロの口から、愛の応答を三度引き出されたのです。イエスは弟子たちの前で、ペトロが神の愛によって赦されたこと、ペトロにはまだやるべき仕事があるということの自信を、彼に取り戻させようとなさったのでした。

問7 ヨハネ 21:15~19 を読み直してください。今回は特に、キリストへの愛を断言するペトロにイエスがどう答えられたかに注目してください。イエスはペトロに、どうするように言われましたか。

神の愛は能動的であって、受動的ではありません。純粋な愛は、優しい気持ち以上のもの、すばらしい考え以上のものです。それには献身が伴います。愛は私たちを行動へ駆り立てます。愛は、切実な必要の中にいる神の子らの世界、失われたこの世に手を差し伸べるよう、私たちを導きます。イエスがペトロに、「わたしの小羊を飼いなさい」とおっしゃったとき、それは命令であるとともに、慰めとなる再確認でした。主は、ペトロに愛に対する応答を要求されました。

何が言いたいのでしょうか。あなたは主をひどく落胆させたかもしれません。あなたは行動によって、主を知らない、と一度ならず裏切ったかもしれません。しかしありがたいことに、恵みは今も手に入れることができますし、神はまだあなたとの関係を断ってはおられないのです。あなたが自ら望むなら、神の働きの中にあなたの活躍の場はまだあります。

ペトロとイエスの会話が終わる頃、2人が湖のほとりを歩いているのが見えます。波が岸に打ち寄せる中、イエスはペトロに弟子であることの犠牲について語られます。彼は、もしペトロが「わたしの羊を飼いなさい」という招きを受け入れるなら遭遇するであろうことを、はっきり知らせたいと思われたのです。

問8 ヨハネ 21：18、19 を読んでください。イエスはペトロに、弟子であることの犠牲について、何と言われましたか。イエスはなぜ、ペトロの人生のこの時点で、彼を驚かすようなことを明らかにされたのだと、あなたは思いますか。

イエスはこれらの言葉の中で、いつの日かペトロが経験するであろう殉教を予告されました。彼の両手は十字架上で伸ばされるのです。このような啓示によって、キリストはペトロに選択の機会をお与えになりました。人生最高の喜び、神の国に魂が勝ち取られるのを目撃する機会をお与えになったのです。ペトロは五旬祭の日に、何千人もの人がキリストのもとへ来るのを見るでしょう。彼はイエスの名において奇跡を行い、さらに多くの人前でイエスの栄光をあらわすでしょう。宣教において、ペトロはキリストと交わる永遠の喜びを得るのです。

しかし、その特権には代償が伴います。それは犠牲を、究極の犠牲を要求するでしょう。ペトロは、すべてを承知の上で誓いを立てるか、問われたのです。今やペトロは、この世に宣教するイエスの働きに加わるのに、どんな犠牲も大きすぎることはない、知っていたからでした。

問9 I ヨハネ 3：16～18 を読んでください。単にあいまいな抽象的概念としての愛に置き換わるヨハネの愛とは、どのようなものですか。彼は愛の究極的な犠牲を、どのように定義していますか。

永遠の中では、私たちがこれまでにしたことは、犠牲には思えないでしょう。愛を行動に移し、意図を献身に変えることは、なんと喜びでしょう。イエスが適切に表現されたように、「このことが分かり、そのとおりに実行するなら、幸いである」(ヨハ 13：17)。人生最高の喜びと永続する幸せは、私たちが自分の存在意義を満たしているときにもたらされることなのです。

イエスとの永遠の命と永遠の人生を想像してみてください。それはどのような人生ですか。クラスで話し合ってください。

「教会の霊的な監督をしている人たちは、教会員1人ひとりが神の働きの何らかの役割を果たすような機会を与えられるように、方法や手段を考案すべきである。過去においてあまりにもしばしば、このことがなされてこなかった。あらゆる人のタレントが活発な奉仕の中で用いられるように、計画をはっきり立て、これをしっかり実行してこなかった。そのためにどれほど多くのものが失われたのかを自覚している人は、ほんの少ししかない。

神の働きにおける指導者は、賢い將軍たちのように、前進するための計画を常に立てるべきである。計画する際には、友人や隣人たちのために信徒がなせる働きについて、特に研究しなければならない。この地球における神の働きは、私たちの教会を構成している男女の教会員がこの働きのために結集し、牧師や教会役員と一致協力するまでは、決して完結しないのである。

罪人の救いには、熱心で個人的な働きが必要とされる。私たちは、彼らがやって来るのを待つのではなく、命の言葉を彼らに届けるべきである。ああ、私が熱心に働きへと人々を目覚めさせる言葉を語ることができればよいのに！ 今や私たちに与えられている時は少ない。私たちは永遠の世界とのまさに境界に立っている。一刻の猶予もならない。一瞬一瞬が大切であり、ただ自己奉仕にだけ用いるにはあまりにも貴重である。だれが神を熱心に尋ね求め、伝道地で忠実な働き人となるための力と恵みを神から引き出すのだろうか。

どの教会にも、適切な働きによって育成するなら、この働きにおいて大きな助けとなる才能豊かな人たちがいる。私たちの教会を築き上げるために今必要とされているのは、教会内の才能豊かな人たち——主に用いていただくために教育できる才能豊かな人たち——を見分け、育成する、賢明な働き手のすばらしい働きである」（『教会への証』第9巻116、117ページ、英文）。

話し合いのための質問

- ① 金曜日のエレン・G・ホワイトの引用文において、中心的な考えは何ですか。それは、あなたの個人的なあかしや、あなたが所属する教会の伝道活動に、どのような影響を及ぼしますか。
- ② 純粋な愛は、いつもどのようにあらわれますか。純粋な愛とはほとんど関係のない偽りの愛とは、どのようなものですか。
- ③ 安息日学校のクラスで、（命を失うことも含めて）人々が主のために払った犠牲について話し合ってください。それらの物語から、あなたは何を学ぶことができますか。